

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「イオン系、感染症専門人材が清掃 病院での知見応用」
- 2) 「ローソンが食器・洗濯用洗剤を量り売り、脱プラスチックにつながるか」
- 3) 「手押し車をベンチに コロナ禍のトロントで生まれた公共サーキュラーデザイン」

---

1) 「イオン系、感染症専門人材が清掃 病院での知見応用」

イオン子会社で施設管理大手のイオンディライトは感染症の専門教育をした人材による清掃サービスを9月から始める。新型コロナウイルスの流行を踏まえ、感染源となりやすい手すりといった場所の清掃を強化する。これまで重視していた美観の維持だけでなく、感染対策の強化も顧客に訴えていく。

病院の清掃業務の受託で培ったノウハウを応用する。感染対策の社内講座をレベル別に3つ用意し、清掃員に防疫面の専門知識を身につけてもらう。人の接触が多く感染の温床となりやすい場所について、それぞれ使用すべき溶剤や必要な清掃頻度といった実践的な内容を指導する。

教育を受けた人材は「防疫対策清掃チーム」と書かれたシャツを着る。施設の訪問者に衛生管理の徹底をアピールする。

(2020/08/29 日本経済新聞)

消毒など感染対策に過敏になっている今、実際どこまで徹底して対策が行われているのか確かめようがないのが事実だ。大手だからこそできるサービスかもしれないが、小さな店舗でもよりわかりやすく消費者に伝えることは可能ではないだろうか。このニュースでいう肩書きの書かれたシャツなど、「見える化」することによって安心感に繋がるかもしれない。

---

2) 「ローソンが食器・洗濯用洗剤を量り売り、脱プラスチックにつながるか」

ローソンは26日から都内にある直営の「ナチュラルローソン」2店舗で洗剤の量り売り実験を始める。来店客自身が、食器用洗剤、洗濯用洗剤など4種類ある商品タンクからマイボトルなど好きな容器に入れることができる。9月には病院内のナチュラルローソンに導入する予定で、店舗数やカテゴリーの拡大も検討する。

芝浦海岸通店（東京都港区）と神宮外苑西店（同渋谷区）で始める。食器用洗剤は100グラム当たり消費税抜き70円で、洗濯用洗剤が同80円。柔軟剤は同110円。マイボトルを持参していない人には、無料の容器もある。自身で必要量を充填して、発行されるシールを容器に貼ってレジで支払う。

既製品のプラスチック容器削減につながる狙いで実験開始を決めた。新型コロナウイルスによる在宅時間増加の影響で、洗濯頻度が増えナチュラルローソンの7月の洗剤カテゴリーの売上高は前年同月比で2割超伸長している。

(2020/08/26 日刊工業新聞)

洗剤類は大容量の詰替製品も充実しており、ストックしても食品のように消費期限がすぐにくることもないのでこの量り売りがプラスチック削減にどれだけ効果があるのか気になる。9月からは病院内店舗に導入するとのことだが、このように一時的に滞在する場所であれば使い切る量だけ購入できるのでありがたいサービスだと思う。洗剤よりも飲料や食品など購入頻度の高いもので量り売りが広がれば効果も目に見えてくるのではないかな。

---

### 3) 「手押し車をベンチに コロナ禍のトロントで生まれた公共サーキュラーデザイン」

新型コロナウイルスによって、密閉空間が避けられるようになり、街中での人々の行き来は減少した。不要不急の外出にも歯止めをかけざるをえない状況の中、人が密集しておらず、常に空気が換気されている場所——すなわち、アウトドアの人気は高まりつつある。そんな圧迫感のある社会状況で、アウトドア空間を使って、しずみがちな気分を和やかにしてくれるユニークなアイデアがカナダのトロントで誕生した。それが、セント・ジェームズパークの近く、キング・ストリートに誕生した手押し車のベンチだ。

この手押し車のベンチは、トロント在住のアーティストであるジョン・ノットン氏の作品だ。トロントでは、キング・ストリートに設置する、「道端で人々がより良い時間を過ごせるベンチ」を選ぶコンペ、Temporary Parklet Design Buildがここ数年、行政によって開催されている。実用性と見た目の面白さの両立が要求される、難易度の高いコンペだ。ノットン氏は、このコンペの2020年の優勝者だ。

『Plant It Forward』と名付けられたこのベンチの設計の根底には、サーキュラー・エコノミーの思想が流れている。現に、ベンチに使用されている木材は、150年前の蒸留酒製作所で使われていた廃材や、古い工場からもってきた合板だ。

「都市の中の庭」や「没入感」というテーマを意識したというベンチの周りには、インゲン豆が植えられている。コンクリートが多い都市の中でも、土や植物を身近に感じられる、ユニークな仕掛けだ。さらに、このインゲン豆の7つのプランターは、セント・ジェームズ・パークの雨水収集システムを使って育成されている。インゲン豆は誰でも収穫可能で、もちろん手押し車に座りながら食べることもできる。

このベンチはコンペの展示期間が終わった後、そのまま寄付され、道端の憩いの空間として残される予定だという。

日の光にあたりながら、気のおけない人々と集まっておしゃべりをする行為は、人間にとって極めて基本的で、精神の充足にとってなくてはならないものだ。新型コロナウイルスの蔓延によって、そのような状況にも気を遣わなくてはならない状況だが、今回紹介したトロントのベンチのようなアイデアが、心を和ませる時間を取り戻してくれるかもしれない。

(2020/08/27 IDEAS FOR GOOD)

海外のニュースをみているとコロナ禍で様々な新しい取り組みやアイデアが発表されており、中でもデザイン性のあるものやユニークなものが日本に比べて多い気がする。今まで経験したことのない日常生活を強いらられる中で特に「デザイン」は二の次にされているかもしれないが、今だからこそちょっとした面白みや心が和むような仕掛けが必要だなと改めて実感した。